

## フジ(ノダフジ)

宮内 泰之

(人間社会学部社会園芸学科)

*Wisteria floribunda*

MIYAUCHI Yasuyuki

### 1. はじめに

フジ(*Wisteria floribunda*)はマメ科フジ属のつる性落葉樹である。本州、四国、九州に分布する日本固有種である。低地から山地の林縁や明るい樹林内に主に生育する。花は5月、枝の先に20~100cmの総状花序が垂れ下がる。この時期、雑木林を外から眺めると、紫色の花房がところどころに垂れ下がっているのを見ることができる。また、田の代かきや田植えの時期に、風に吹き散らされたフジの花が田の水面に浮かんでいるのもよく見かける光景である。このため、フジの開花を農事暦として利用していた地域もある。庭園や公園、庭木としてもよく植えられる。特に、藤棚としての利用が多く、開花期には全国各地の名所に大勢の人が訪れる。夏季の藤棚は緑陰として来訪者に利用される。果実は長さ10~20cmの豆果で、秋に熟す。つるは籠を編む材料に適している。

フジの近縁種としては、本州の近畿地方以西、四国、九州に自生するヤマフジ(*W. brachybotrys*)がある。日本に自生する2種は、フジが根元から見て左巻き(反時計回り)に巻き上がるのに対して、ヤマフジは右巻き(時計回り)に巻き上がる点で区別できる。また、フジの花序は前述の通り長いものは100cmに達するのに対して、ヤマフジの花序はせいぜい20cm程度の長さにとどまる。花の咲き方も異なり、フジは花序の基部から先端に向かって咲いていくのに対して、ヤマフジの花はほぼ同時に開花する。ヤマフジの白花品

種をシロカピタン(白花美短‘Alba’)と呼び、よく利用される。本州の関東地方南部以西に分布するナツフジ(*Millettia japonica*)は、属は異なるが、つる性の羽状複葉であるため、見間違える場合がある。つるはフジと同じく左巻きであるが、花の色が淡黄白色であるため、開花期には先の2種とは容易に区別ができる。中国には河北から四川、広東省にかけて分布するシナフジ(*M. sinensis*)がある。ヨーロッパ、北アフリカ、カリフォルニアなどで多く栽培されており、園芸品種も多い。花序は30cmに達し、つるはヤマフジと同じく右巻きである。アメリカにはバージニアからフロリダ州にかけて分布するアメリカフジ(*M. frutescens*)がある。アメリカでも栽培は少ない。つるはフジと同じく左巻きである。

なお、つるの巻く方向の表現であるが、これまで多くの提案がなされてきている。牧野富太郎により上から見て巻く方向を判断するよう提唱され、これに従うものがほとんどであった。自然科学の分野では、右ねじの方向、つまり、進行方向に向かって右に巻くか、左に巻くかを判断するのが一般的である。したがって、分類学者により編集されている近年の図鑑では、根元から見て右巻き、左巻きと表現されている。いずれにせよ、どこから見てどちら巻きなのか、ということを明記する必要がある。

## 2. 日本人との関わり

フジという和名の由来は定かではない。『新牧野日本植物図鑑』には、「ふぢハ吹き散るノ意ト謂ハレド果シテ然ル乎否乎」とある。また、牧野は『植物一日一題』において、藤という漢字は単に‘かずら’、つまり‘つる’の意味であり、種としてのフジを限定するものではない、と述べている。古事記の応神天皇記には、「取布遲葛而(フチかずらをとりて)、…(中略)…悉成藤花(ことごとくにフジのはなになりき)」という描写がある。つるの状態では‘布遲’、花については‘藤’と分けて表記されている点が興味深い。‘藤葛’と表記すると、‘かづらかづら’と同じ意味の言葉が重なってしまうのを避けたのであろうか。なお、この場面ではフジのつるから衣や沓、弓矢を作ったとある。既にこの時代に‘フチ’もしくは‘フジ’と呼ばれて利用されていたことがわかる。

万葉集の中でフジを詠んだ短歌は21首ある。その多くはフジの花を‘藤波’と表現している。フジの花序が幾重にも垂れ下がり、風にそよいでいる様子を波にたとえたのであろう。そのうち、例えば、「我が宿の時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が笑まひを」のように、庭に植えたと推測される状況を詠んだものは3種しかない。一方、「藤波の花の盛りにかくしこそ浦漕ぎ廻つつ年に偲はめ」のように、水上をゆく船の上からフジを眺めている状況を詠んだものが6首ある。ただし、この6首はいずれも‘布勢の水海’という湖(現在の富山県氷見市に存在したと伝えられる、海とつながる汽水湖?)の情景を大伴家持らが詠んだものである。この他、野山の情景を詠んだものと思われる歌が3種ある。いずれにしても、この時代既にフジは庭に植栽されていたが、野山や海辺に揺れる藤の花を観賞することが多かった様子が見えてくる。

枕草子の第八十四段には、「めでたきもの(中略)色あひ深く花房長く咲きたる藤の花、松にかかりたる。」とある。平安時代、庭内ではフジをマツに絡ませ、その花を愛でていたようである(図1)。源氏物語の第十五帖蓬生においても同様に、「大きな松に藤の咲きかかりて、月影なよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく」とある。しかし、第四十九



図1 「法然上人絵伝」第四巻五段

帖宿木では、「右の大臣、按察使大納言、藤中納言、左兵衛督。親王たちは、三の宮、常陸宮などさぶらひたまふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり」と描写されており、この前後にマツの存在は明らかではない。右の大臣をはじめとする6名もの殿上人の座をフジの花のもとに確保するためには、面的なフジの広がりが必要であったと考えられる。はたして、これは藤棚のようなものが設置されていたのであろうか。飛田(2002)には、「棚作りが行われるようになったのは、江戸時代からのことのように思う。」とあるように、藤棚の起源については明らかではない。

フジの別名をノダフジという。これは、摂津国野田(現在の大阪市西成区

付近)の藤之宮にフジの名所があったことにちなむ。室町時代には二代将軍足利義詮が住吉大社に参詣に行く途中、野田の玉川のほとりにフジの花がきれいに咲いていたのを見たことが、義詮の詠んだ和歌と共に伝えられている。安土桃山時代には豊臣秀吉もこのフジの見物に訪れたほどで、「吉野の桜、野田の藤、高雄の紅葉」ともてはやされたそうである。幕末に歌川広重が「名所江戸百景」の一つとして描いた亀戸天神境内には、フジと藤棚が描かれている。この絵の説明書きに、植えられた品種は大阪から導入された野田藤である、とある。亀戸天神のフジは今から350年前の江戸時代初期に植えられ、それから今日に至るまでフジの名所として多くの人々が見物に訪れている。

### 3. ヨーロッパへの導入

ヨーロッパに最初に導入されたフジはアメリカフジである。1724年、北米カロライナで植物採集をしていたマーク・ケイツビーが標本をヨーロッパに送り、*Glycine frutescens*と命名され、その種子の形からカロライナインゲンマメとよばれた。しかし、花序が小さく、香りが少なかったためか、後に伝わるアジア産のフジのように広く使われるようにはならなかった。

シナフジについては、18世紀の初頭、フランス人宣教師ドメニク・パレニンが、「大きな枝から美しい紫色の花を垂れ下げるつる植物」としてヨーロッパに初めて紹介した。しかし、シナフジをヨーロッパで見ることができるようになるのは、1816年に広東に拠点を持つ東インド会社に勤めていたジョン・リーブスによりもたらされるのを待つことになる。彼は地方の中国人商人の庭でシナフジを手に入れたのであった。1819年には、学名が*Glycine sinensis*から*Wisteria sinensis*(当初は*Wistaria*と表記された)へと変更された。1844年には、プラントハンターのロバート・フォーチュンの庭で白花品の*W. sinensis* 'Alba'が見つかった。

日本の2種のフジは3人の医師によりヨーロッパに紹介された。エンゲルベルト・ケンペルは、1712年に著書『廻国奇観』の中で、フジとヤマフジについてToo FudsiとJamma Fudsiとして表記している。1784年には、カール・ツンベリーが著書『日本植物誌』の中にフジを記載している。さらに、1820年代、フィ

リップ・シーボルトがフジの生体標本を送っている。しかし、日本のフジが栽培されるようになるのは、アメリカでは1830年、ヨーロッパではさらにその後のこととなる。

#### 4. イギリス庭園でのフジの活用

イギリスでは、1872年にウィリアム・ロビンソンが『The Garden』の中で、「もっとも汎用性が高く、価値のあるつる植物」と述べている。また、ガートルート・ジーキルは1913年に出版された著書『Gardens for Small Country Houses』のなかで、「素晴らしい植物の思いがけない誤用」と表現している。中国及び日本産のフジは、一般的にはまだ使われていなかったのであろう。ジーキルが住まい、庭の設計も行ったマンステッド・ウッドのメインボーダーには、その壁面の背後から枝を伸ばし紫色の花序を垂れ下げるシナフジを見ることができる(図2)。



図2 メインボーダー背後のフジ  
(マンステッド・ウッド)

その後、イギリスではこれらアジア産のフジが、家の壁面を覆わせたり、パーゴラに這わせたりと広く使われるようになっていく。ケント州のシシングハースト・キャッスルガーデン内にある有名なホワイト・ガーデンには、その片隅のパーゴラを白花のフジが覆い、さらに隣接する建物の壁面をよじ登っている(図3)。このフジは*W. venusta*(*W. brachybotrys*のシノニム)、ヤマフジの白花品シロカピタンであろう。花期にフジ棚の下で佇んでいると、フジの花の芳香がほのかに漂ってくる。ホワイト・ガーデンの中央の白バラが満開になり、文字通りガーデンが白い花々におおわれる6月には、パーゴラの木陰から素晴らしい景色を眺めることができる。



図3 ホワイトガーデンのパーゴラ  
とフジ(シシングハースト)

また、同園内のモート・ウォークには、*W. sinensis* ‘Alba’ が壁の向こうから枝を伸ばして白い花序を垂れ下げ、正対するアザレア・バンクの朱や黄色のアザレアの花と対称的な彩りの園路を作り上げている(図4)。



図4 モートウォークのフジ  
(シシングハースト)

コッツウォルズのヒドコート・マナー・ガーデン内のローズ・ウォークには、ビスタのアイ・ストップとしてシナフジが植えられており(図5)、この下に置かれたベンチから逆にビスタの両脇のボーダーを眺めることができる。コッツウォルズは蜂蜜色の石材を用いた建物や住宅が街の景観を特徴づけていることも有名である。この蜂蜜色の壁面にフジの枝を這わせた家もところどころに見ることができる(図6)。

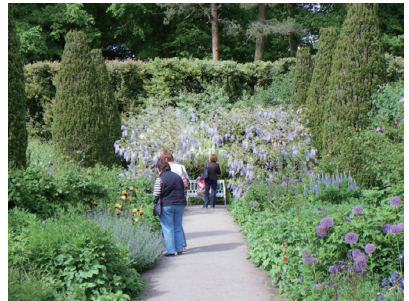


図5 ローズウォークのフジ  
(ヒドコート・マナー)

この他にも、イギリスでは多くの庭園や個人の庭にフジが使われている。どの品種が、庭のデザイン上どのような役割を担っているのか、ということを考えながら鑑賞してみるのも一興である。

## 5. フジの園芸品種

フジの園芸品種は以下に示す7品種が基本となっている。



図6 壁面を這うフジ  
(コッツウォルズ)

### (1) シロバナフジ(白花藤 ‘Alba’)

花は白く、中心部がやや黄緑色がかかる。花序は長さ20～30cmのものがふつうであるが、さらに長く下垂するものもある。盆栽や棚仕立てとして利用

される。

ショウワシロフジ(昭和白藤) - やや開花期がはやく、花序は長さ40cmほどである。昭和の初期にできた園芸品種で、本品種の方が白フジでは普及している。

## (2) ノダナガフジ(野田長藤 'Macrobotrya')

古くより関東地方で培養したもの。俗に「六尺藤」などとよばれる。花穂は80cmに及ぶ。棚仕立てとして利用される。国の天然記念物に指定されている「牛島のフジ」(埼玉県春日部市大字牛島の藤花園にある)は有名で、樹齢1,200年以上といわれ、花序が長さ90~100cmくらいになる。埼玉県内には本品種の系統が多い。

## (3) アケボノフジ(曙藤 'Albrosea')

「口紅フジ」ともよばれ、蕾のときに淡紅色で、開くと旗弁の先が淡紅色となる白花品。花序は長さ25cmあまり。開花は4月下旬から5月上旬で、普通種よりやや早く咲く。

## (4) ベニフジ(紅藤 'Rose')

「桃色藤」ともよばれ、花は淡紅色である。花序は長さ30cmくらい。花期は5月上旬で、新葉に少し緑褐色が見られる。結実もよいが、ときに隔年開花になりやすい。盆栽や棚仕立てとして利用される。

## (5) イッサイフジ(一才藤 'Nana')

フジの代表的な系統。花はやや淡紫色。接ぎ木して幼木で開花させる鉢用品種として多く生産されている。花序は20~30cm。若木のうちから花をつけるので、一才の名がある。接ぎ木して幼木で開花させる鉢用品種として多く生産されている。開花期は露地で4月下旬であるが、鉢ではやや早い。

一才藤の品種のうちヤツブサフジ(八房藤)は、古くから栽培されており、花序が分岐していることからこの名がある。花は小輪で、藤紫色。花序の長さ10~20cm。盆栽や庭木に仕立てられる。この他、野田一才藤(濃藤紫色)、長崎一才藤(青紫色)、浅黄藤(空色がかった淡藤色)等の品種がある。

## (6) ヤエフジ(八重藤 'Violaceoplena')

「八重黒竜」ともよばれ濃紫色の八重咲き品。花序は長さ30cmくらいになり、花が丸く見えるので「玉藤」とよばれたり、花色から「黒藤」とよばれたり

して市場に出ることがある。本品種の一重咲きに‘黒竜’とよぶ濃紫色の園芸品種もある。

(7)ファイリフジ(斑入り藤‘Variegata’)

「錦藤」または「変わり葉藤」ともよばれる。葉に黄色の斑が散在する。花は淡紫色で、長さ30cmあまりの花序につく。5月上旬に開花するが、花つきはあまり良くない。

参考文献

Adam Nicolson (2008)、*Sissinghurst*, 22,32-33、The National Trust

David Marsh (2014)、*Wisteria...*、Parks & Gardens UK、(<http://parksandgardensuk.wordpress.com/2014/08/02/wisteria/>)

飛田範夫 (2002)、日本庭園の植栽史、p.99、京都大学学術出版会

池田亀鑑 (1962)、枕草子、岩波書店

小松茂美 (1981)、法然上人絵伝、続日本絵巻大成1、p.34、中央公論社

倉野憲司 (1963)、古事記、岩波書店

牧野富太郎 (2008)、新牧野日本植物図鑑、北隆館

牧野富太郎 (1998)、植物一日一題、博品社

中村恒雄 (1994)、フジ属、園芸植物大事典2、2033-2037、小学館

佐佐木信綱 (1954)、万葉集、岩波書店

山岸徳平 (1965)、源氏物語、岩波書店